



【本田】熊本市現代美術館のエントランスすぐに設けられているホームギャラリー(美術図書室)はとても雰囲気素敵ですね。美術館としての癒しの空間を感じ取れます。そのギャラリーの片隅にはトラップを見かけました。今回はIPMの取組みについて話を伺いますが、熊本市現代美術館では学芸員だけではなく、

総務職員も含めた全館で取り組まれている点がポイントですね。

【木本】それでは、はじめに熊本市現代美術館のIPM実践に至るきっかけについてお話を伺いたいと思います。

【藤原】熊本市現代美術館では2年前に薬剤燻蒸による大きな事故を起こしてしまい、所有者や寄託館をはじめ、多くの関係者の方々にご迷惑をお掛けしました。美術館では展覧会作品の貸し借りの度に、必要に応じた薬剤燻蒸の実施を行いますが、その薬剤燻蒸への固定観念と、他方で私たちの作品への保存

管理や燻蒸薬剤に関する知識の欠如が起因しました。

【藤原】特に当館では複合ビルの為に燻蒸の経験がありませんでした。燻蒸業者と学芸との協力が十分になされておらず、燻蒸業者への返信がありました。この事故を真摯に反省した上でより良い館作り、環境づくりに館全体の運営システムの変更に着手することになりました。ちょうど九州国立博物館(以下、九博)より文化財保存研修案内があり、研修に参加したことでIPMを知るきっかけになりました。



ホームギャラリー(美術図書室)

なければならぬのです。

【木本】最後に今後の活動の発展についてお話を伺います。

【藤原】当館は開館してから10年余り、IPM活動についてはまだ始めたばかりです。IPM活動については正直、職員みんなにとって「後から出てきた業務」であることは否めません。「IPM業務」と言えるほど日常業務へ落とし込めるよう、気持ちを切り替えることが重要だと認識しました。九博での研修は、意識の変化を与えてくれる貴重な時間でした。資料保存に関する知識向上だけではなく、IPMの理念を共感でき、特に研修に参加した他館の活動や状況を知るのも非常に勉強にもなるし、面白い1年、2年と経験を積み重ねながら、全職員が「IPM業務」に携われるように発展させたいと思います。190名のボランティアの方をはじめ、ミュージアムショップやレストランの運営会社、さらにビル管理会社も含めた外部との連携を拡げていきたいと思っています。

【藤原】IPM研修や実践活動をしていると、IPMは来館者サービスでもあるのではないかと感じることもあります。個人の意識の変化と共に、館全体の運営・管理にも影響を与えてくれました。一般に学芸と総務は区分されますが、「IPM」を合言葉に共通の目標ができたことで、他の業務についてもお互い共有することができたし、各々の業務への理解も可能になったことが大きなポイントでしょう。各部門が孤立化しないように、さらに職員間連携の発展を期待していきたいと思っています。

【藤原】よりよい館づくり、環境づくりへ着手したばかりです。当館のIPMチーム

は総務の杉谷さん、ライブラリアン(図書館司書)でもある蔵座さん、学芸の私のバックグラウンドが違う混成チームです。これまで学芸は作品を中心に、総務は人を中心に見ていた各専門の視点や館の運営管理の視点で手を合わせて進めていき、来館者サービスへつながるように発展していきたいと思っています。館内では10年計画で、幹部も含めた全プロパー職員が九博研修を受講するプランも構想しています。また、今年の当館のボランティアの研修旅行では九博の環境ボランティアとの交流を計画しています。職員とボランティアの方々とともに、IPMを意識した美術館の環境づくりに取り組むことで、自分たちの自信に繋がっていきたいと思います。

【本田】「IPM」をキーワードにした総務と学芸の一体感は見事です。見習いたいものです!これまで文化財の扱いは学芸のプロの領域とされていましたが、文化財を総合的にまもることはイコール総務担当にとっても来館者サービスの一環であるという視点は興味深いところです。また館内外に広がるミュージアムにかかわる色々な立場の人たちの交流もこれから楽しみです。

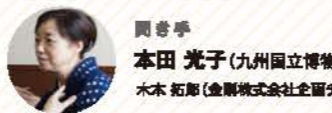
【木本】今日は貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました。

全館一丸でのIPMへの取組み

熊本市現代美術館



話し手
富澤 治子(学芸班 主任学芸員)
蔵座 江美(学芸班 主任学芸員・司書)
杉谷 和泉(総務班)



聞き手
本田 光子(九州国立博物館 学芸部 特任研究員)
 木本 拓郎(金剛株式会社企画チーム チームリーダー)

【本田】この事故はどこでも起こりえたことを十分に認識しなければなりません。これまでの薬剤依存が臭化メチルの全廃以降、それに代わる文化財認定薬剤及び資料保存管理手法の周知が行き渡っていないこと、さらにもう少し踏み込んで言えば、資料の生物被害対策そのものが丸投げで外部委託されていることが反省すべき点でした。

【木本】研修をきっかけにした館内での取組みについてお話を伺います。

【藤原】平成22年に3日間の九博研修を終え、当館が日常管理を何もできていなかったことに気づきました。例えば九博では場所によって湿度のバラツキがあることを把握されていますが、当館ではそのような環境の違いや変化は把握していませんでした。それは当館が新しい施設設備の為に返信し、環境づくりの

必要性を誰も感じていなかったということでした。早速、館内の展示室や収蔵庫の数か所にトラップと温湿度記録計を配置し、自分で「むし・カビ記録ノート」を作成し記録を取り始めました。

【藤原】富澤さんの九博研修報告が起点に、「むし・カビ記録ノート」の情報共有が進みました。それまで虫やカビ、環境づくりへの意識がなかったので、非常に刺激を受けました。特に「むし・カビ記録ノート」には袋詰めした実際の虫が添付してあり、場所と時間を記録されていますので、リアルな資料になります。(笑)職員全員に回覧し始めてしばらくしてから、事務局長が施設図面に虫の捕獲場所のマッピングをしてくれました。マッピングからどこに虫が多くいるのかが判別できて重宝しましたし、このマッピングから職員全員の意識の変化を感じました。



IPMチームの活動の様子

【杉谷】研修報告を受けて、みんなでやろうとなったのですが、「みんな」とはどこまで共有していけばいいのか?という疑問もありましたし、「学芸のみ」であって総務担当の私が作業をやるのは当初は思いませんでした。

【本田】では総務の杉谷さんが九博の研修に行くことは大変だったのではないのでしょうか。

【杉谷】事故については誰か一人の責任ではなく、館全体としての意識と取組みが重要だと思いました。ですから研修に



文化施設

熊本市現代美術館
 所在地/熊本市中央区上通町2-3
 開館時間/10:00~20:00
 休館日/火曜日(休日を除く)、年末年始
 観覧料/常設展示室:無料
 企画展示室:展覧会によって設定
 URL/http://www.cemk.or.jp/